

# 横尾忠則の恐怖の館

## Yokoo Tadanori's Haunted Museum

2021年9月18日(土)—2022年2月27日(日)

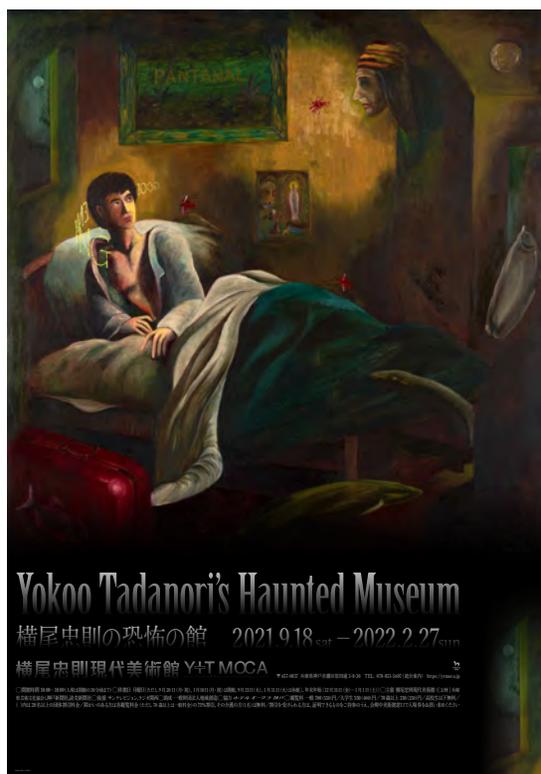
開館時間 10:00—18:00

※ 入場は閉館の30分前まで

休館日 月曜日(ただし月曜が祝日の場合は開館、  
翌平日休館)

年未年始〔12月31日(金)—1月1日(土)〕

会場 横尾忠則現代美術館



ポスター(デザイン:横尾忠則)

### 展覧会について

我々は未知のものに対してしばしば恐怖を抱きます。それは好奇心と表裏一体であり、怖いけど見たい、といったアンビバレントな感情を誘発します。

横尾忠則は、見えるものや科学で説明できる領域外のものにも、一貫して関心を寄せてきました。それには、郷里の西脇での幼少期の体験が深く関わっています。都会ではありえない深い闇や、神秘的な体験の数々は、『江戸川乱歩全集』の挿絵を始めとするイラストレーションや、画家宣言以降の絵画作品にも色濃く反映されています。

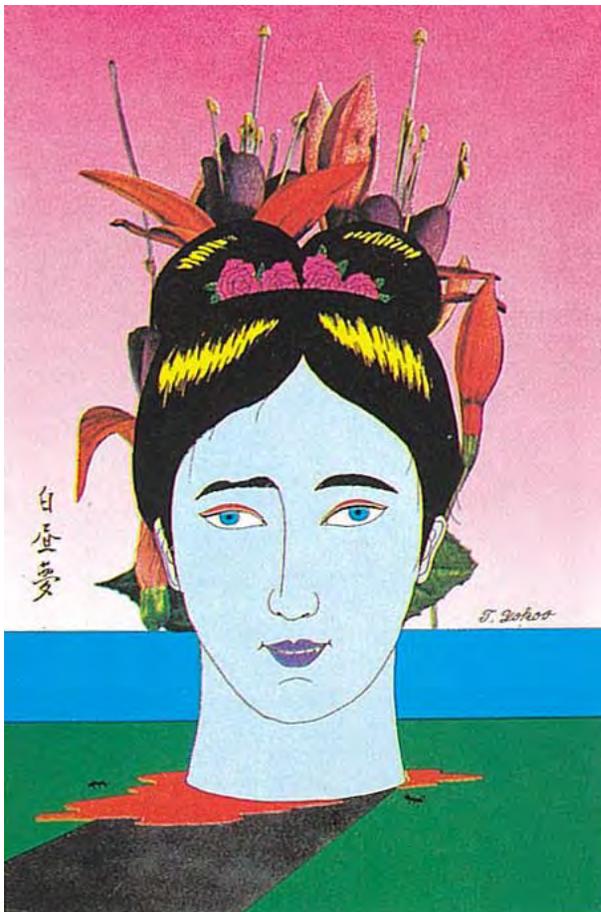
本展は、そうした横尾の多彩な作品を通じて、「芸術」と「恐怖」との関係性について考察するものです。

## 乱歩迷宮

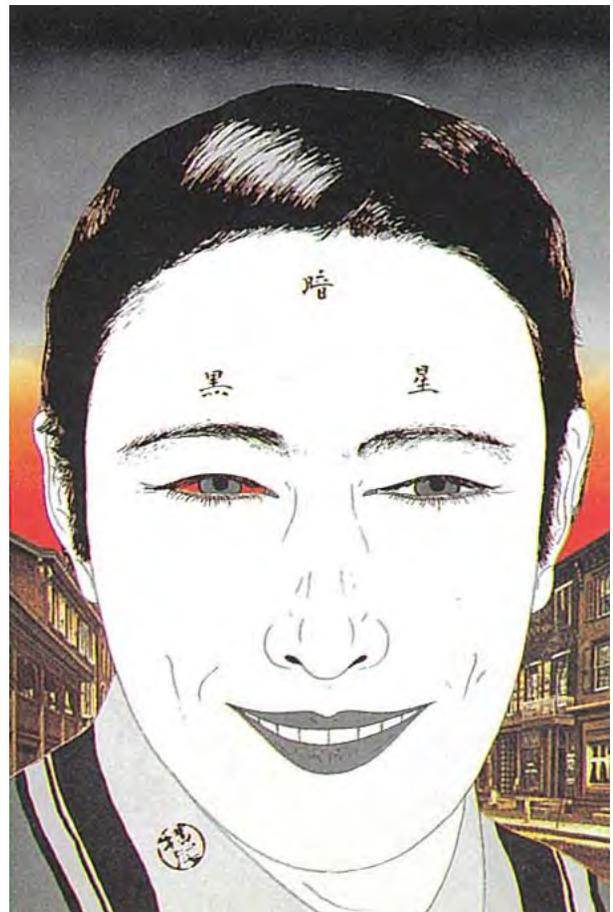
1968年、横尾は講談社版『江戸川乱歩全集』の挿絵を、古沢岩美、永田力とともに描いた。他の二者が茫洋としたほの暗い画面により、都会の闇で起こる猟奇的な世界観を表現しているのに対し、横尾の作品は切れ味の鋭い線描と鮮やかな色面による明晰さが際立っている。さらに、必ず小説のタイトルを毛筆体で画面に書き入れているのも、他と大きく異なる点である。これらの文字は、ある時は人物の顔面と一体化し、またある時はタイトルとイメージの相乗効果や乖離が読者の想像力を刺激するなど、欠くべからざる画面の構成要素となっている。極めて明快でモダンであるがゆえに、かえって前近代的な闇や猟奇性が際立つという逆説性は、横尾にしかなし得ない離れ業だといえるだろう。

さらに特筆すべきは、横尾の挿絵が、必ずしも特定の場面を説明的に描写するものではない、という点である。挿絵を構想するにあたり、横尾は小説を通読するのではなく、ランダムにページを開き、目に飛び込んできた断片的な語句から自由にイメージを膨らませていった。イメージーションの発露が優先されるあまり、時には原作のストーリーから逸脱することも厭わない。それはもはや、単なる挿絵の範疇を超えた、独立した美術作品といっても過言ではない。

本展の導入部分では、これらの挿絵を用いた、ウォークスルー型のお化け屋敷をイメージしたインスタレーションを設ける。お化け屋敷や見世物小屋、大衆演劇などは幼少期の横尾の美意識の形成に大きな影響を与えたが、本展における「乱歩迷宮」は、そうした異界へと通じる、一種のタイムトンネル的な役割を果たすものである。



《白昼夢 江戸川乱歩全集(講談社)挿画》  
1968年  
サイズ可変  
インクジェット・プリント  
横尾忠則現代美術館蔵

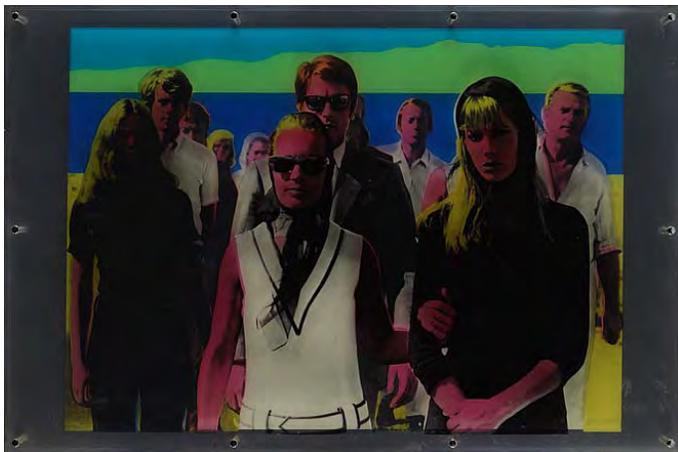


《暗黒星 江戸川乱歩全集(講談社)挿画》  
1968年  
サイズ可変  
インクジェット・プリント  
横尾忠則現代美術館蔵

## 葬列

ポートレートは横尾にとって重要なモチーフのひとつである。ただし横尾の場合、それらが常に「死」と表裏一体であることが、極めて重要である。1969年の版画《葬列》は、ジャック・ドレー監督の映画「太陽が知っている」(1968年)における葬列シーンのスチル写真を色分解し、6枚の亚克力板に分割して刷り、間隔をおいて重ね合わせたものである。印刷プロセスを可視化することで、版画というメディアに対する批評性が主題化されている。また同年の版画「風景」シリーズは、《葬列》の方法論を展開させたもので、色分解されたイメージが刷られた透明フィルムを重ねることで、やはり意図的に版ズレを生じさせている。人物の顔などがモチーフであるにも関わらず、「風景」と題されている点には、モデルから個性や人格を剥奪したいという欲求が感じられる。これらの作品がどこか不気味な空虚さをはらんでいるのは、恐らくそのことと無関係ではない。

後年の絵画作品においても、横尾が描くポートレートは物故者がモチーフであることが多い。常にその向こうに「死」を見据えた肖像は、物故者、存命者に関わらず、ある意味すべて「遺影」なのではないか。そんな仮説を念頭に、本セクションは構成されている。



《葬列Ⅰ》  
1969-1985年  
75.1×114.0×10.2cm  
シルクスクリーン・亚克力プレート  
横尾忠則現代美術館蔵



《風景No.9 黄色い女》  
1969年  
90.4×90.3cm  
シルクスクリーン・亚克力フィルム、紙  
横尾忠則現代美術館蔵

## あの世とこの世

年の離れた養父母に育てられた横尾は、友人たちの父兄に比べてはるかに老齢である両親が、もし他界したらどうしよう、という不安を常に抱えていた。その一方で、戦時中には典型的な軍国少年であり、特攻隊として戦場の空に散る自らの姿を、物語的なロマンティシズムと重ね合わせて夢想するのだった。

自らの作品において、一貫して「死」の問題を扱ってきた横尾だが、死後の世界を想像するというよりも、むしろあの世からこの世を観るのだと、独特な言いまわしで表現している。幼い頃から「死」を身近に感じてきた横尾にとって、それは対象化して分析的に捉えるようなものではなく、もはや自らの一部なのだろうか。

女優アニタ・エクバークをかたどった立体作品は、本来は《交叉の泉》という巨大な作品の一部である。《交叉の泉》は、本来は都市開発の一環として構想された巨大なインスタレーションであり、廃墟化したローマの観光名所「トレヴィの泉」と地下の洞窟空間とが表裏一体となる予定だったが、残念ながら実現せず2002年にマケットのみが制作された。マケットといっても幅5メートルを超える巨大さであり、現在は本像をはじめとするパーツのみが現存している。本像は、横尾が敬愛するフェデリコ・フェリーニ監督の映画「アントニオ博士の誘惑」(4名の監督によるアンソロジー「ボッカチオ'70」の一部)から採られている。ビルボードから抜け出した巨大な美女は、禁欲主義者のアントニオ博士を誘惑する。骨抜きにされた博士はついには彼女を殺害し、自身も発狂する。彼女もまた「生」と「死」を自在に横断する象徴的な存在だといえるだろう。



《業》  
1985年頃  
180.0×120.0cm  
アクリル・板  
横尾忠則現代美術館蔵



《交叉の泉 (部分)》  
2002年  
65.0×165.0×50.0cm  
FRP  
横尾忠則現代美術館蔵

## 闇について

天性のカラリストである横尾は、その対極にある「闇」にも一貫して深い関心を寄せてきた。横尾が生まれ育った西脇は兵庫県の山間部に位置する地方都市であり、幼少期、身の回りにはいたるところに深い闇が存在していた。

大都会ではもはや失われた闇を、故郷で再発見したい。そういう問題意識のもとで生まれたのが、2000年以降のライフワークである「Y字路」シリーズである。Y字路というと、三叉路という地理的、空間的特徴がまず意識されるが、本来は故郷の闇をもとめて西脇の夜景を取材するなかで、偶然出会ったモチーフであった。

当初は資料写真を忠実に模写していたが、次第に色彩が導入され、やがてY字路は多彩なイメージの受け皿として展開していく。ところが、シリーズ誕生からちょうど10年目にあたる2010年、公開制作の場で、生乾きの画面をくまなく雑巾で拭き取ることで全体を黒く塗りつぶし、図像が暗闇と一体に溶け合うかのような作品《黒いY字路1》が誕生する。これをきっかけに、横尾は「黒いY字路」シリーズに着手するのだが、それらは「Y字路」の原点である「闇」に回帰するとともに、翌2011年3月11日に起きた東日本大震災、および福島第一原子力発電所の事故による電力不足のため、首都圏が計画停電で闇に沈む様子を、はかrazも予言することになってしまう。

本セクションでは、闇や終末をめぐる横尾の表現と響きあう形で、あたかも美術館が廃墟化したかのような演出を行う。展示室に散乱する備品類は、横尾忠則現代美術館の前身にあたる、兵庫県立近代美術館時代のものが主に使用されている。



《黒いY字路 1》  
2010年  
181.8×227.7cm  
アクリル・布  
作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)



《霊骨》  
2000年  
60.7×73.0cm  
アクリル・黒ベルベット  
横尾忠則現代美術館蔵

## 関連イベント

---

### ■キュレーターズ・トーク

担当学芸員が本展の見どころを分かりやすく解説します

日時:10月16日(土)、11月20日(土)、12月18日(土)、1月15日(土)

※いずれも14:00—14:45

会場:当館オープンスタジオ

講師:当館学芸員

定員:30名(先着順)参加無料

※イベントの詳細や、その他のイベント情報については当館ホームページをご覧ください

## 基本情報

---

### 横尾忠則の恐怖の館 Yokoo Tadanori's Haunted Museum

2021年9月18日(土)―2022年2月27日(日)

**開館時間** 10:00―18:00 ※入場は閉館の30分前まで

**休館日** 月曜日(ただし月曜が祝日の場合は開館、翌平日休館)  
年末年始〔12月31日(金)―1月1日(土)〕

**主催** 横尾忠則現代美術館(〔公財〕兵庫県芸術文化協会)、神戸新聞社、読売新聞社

**後援** サンテレビジョン、ラジオ関西

**助成** 一般財団法人地域創造

**協力** **ホテルオークラ 神戸**

**観覧料** 一般700(550)円、大学生550(400)円、70歳以上350(250)円、  
高校生以下無料

- ・( )内は20名以上の団体割引料金
- ・障がいのある方は各観覧料金(ただし70歳以上は一般料金)の75%割引、その介護の方(1名)は無料
- ・割引を受けられる方は、証明できるものをご持参のうえ、会期中美術館窓口で入場券をお買い求めください

**出品点数** 約80点

- ※ 本展は予約優先制です。詳細は当館ウェブサイトをご覧ください
- ※ 演出上の理由により会場内が暗くなっています。通常よりも作品が見つらい場合がありますが、予めご了承ください
- ※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、検温やマスク着用などへのご理解・ご協力をお願いいたします
- ※ 状況に応じて予定が変更になる場合があります。最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください

## お問合せ

---

### 横尾忠則現代美術館

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30

tel. 078-855-5607(総合案内) fax. 078-806-3888

学芸担当: 山本淳夫<yamamoto\_atsuo@ytmoca.jp>

広報担当: 早水千尋<hayamizu\_chihiro@ytmoca.jp>

画像データは当館ホームページ(<https://ytmoca.jp>)のプレス専用ページからお申込みいただけます  
ホームページに掲載されていない画像は、上記連絡先までご請求ください

## 横尾忠則コレクションギャラリー

### 施設概要

2021年3月より当館4Fに新設された横尾忠則コレクションギャラリーでは、従来アーカイブルームの一部に設けられていた資料展示コーナーを拡張し、アーカイブ資料に加え横尾忠則の手もとに保管されてきた様々なアーティストの作品やコレクションなど多彩な展示を行います。

### 開催展覧会

## YOKOO TADANORI COLLECTION GALLERY 2021 [後期]

2021年3月より当館4Fに横尾忠則コレクションギャラリーが新設されました。ここでは、従来のアーカイブ資料のみならず、長年作家の手もとにあった多彩な作家の作品コレクションなどを様々な角度からご紹介する予定です。この度は、同時開催の企画展「横尾忠則の恐怖の館」展に連動し、展覧会に登場した恐怖のイメージの原画や、それらが実際に使われた書籍や広告をご紹介します。豊富なアーカイブ資料を保管・整理する当館ならではの展示を、企画展とともに楽しみください。



《『江戸川乱歩全集』挿画(原画)》

1968年

19.3×13.7cm

インク・紙

会期 2021年9月18日(土)ー2022年2月27日(日)

※会期中展示替えを行います

[第1期] 9月18日(土)ー12月5日(日)

[第2期] 12月7日(火)ー2月27日(日)

開館時間 10:00ー18:00

※入場は閉館の30分前まで

休館日 月曜日(ただし月曜が祝日の場合は開館、翌平日休館  
年末年始(12月31日(金)ー1月1日(土))

主催 横尾忠則現代美術館([公財]兵庫県芸術文化協会)

観覧料 「横尾忠則の恐怖の館」のチケットでご覧いただけます

※本展のみのチケットは販売していません